

介護、医療、子育て、老後に関する  
ご意見・疑問をお寄せ下さい  
メールansin@yomiuri.com  
ファクス03・3217・9957

# 終末期医療 自分が望む形で

◆リビングウィル(LW)の有無の違い

住み慣れた自宅や地域で暮ら  
し続けるための介護サービスに、「小規模多機能型居宅  
介護」(小規模多機能)があり  
ます。施設への「通い」を  
中心に、自宅への「訪問」を

## 居宅介護

## 利用者ごとサービス組み合わせ

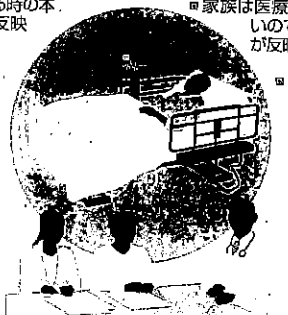
タツプと買い物も散歩に出か  
けることもでき、天気が良  
いときは散歩も出来ます。  
で、施設で訪問理美容を受け  
るのペースに合わせて住み慣  
れた地域で暮らすことも可  
能です。

**ある**

- 家族と医師が終末期医療を選択する時の拠り所になる
- 判断力がある時の本人の意思が反映される
- LWを尊重したことで、家族は本人の亡くなり方に納得できる

**ある**

- 家族と医師の話し合いで、終末期医療が決まる
- 家族は医療の知識が乏しいので、医師の考えが反映されやすい
- 本人の意思が分からず、家族が生じる場合が多い



終活に関する文書の主な特徴

リビングウィル	エンディングノート	遺言書
家族や医療者へ宛てた文書	内容は遺産整理の考え方、終末期医療や介護の希望、非常時の連絡先など	死後の財産の扱いが主な内容
延命希望の有無など、終末期の医療が主な内容	人生の回顧や家族への思いなども盛り込み、内容の自由度は高い	死後に開封されることが多い
意思疎通が難しい終末期に役立つ		伝える主な対象は遺族

## 備える 終活

### 「リビングウィル」

残すなら元気がうちに



今年1月に亡くなった実父が残した書類を読み返す熊谷幸恵さん(札幌市中央区で)

「死期が迫り、苦痛を訴える力もうせな状態になりましたら、延命処置をせず、自然死させてください」  
札幌市在住の熊谷幸恵さん(56)の父親が2017年に記した文書には、終末期の医療の希望が明記されていた。そして20年7月、父親が重度の認知症を

抱えて江別市らん病院(北海道江別市)に入院した際、この文書が病院に提出された。  
医療現場では技術の進歩で、自力で呼吸や食事ができなくなっても、人工呼吸器で体内に酸素を送り込み、腹部に穴を開けて管から栄養を胃の中へ入れたりする「延命処置」が行われている。ただ、本人が望んでいるかどうか、わからな

れることも多い。  
父親は1月になると食べる量が減って終末期に入り、家族は担当の宮本礼子医師と今後の栄養について話し合った。その結果、本人の意思を尊重して、点滴や、鼻胃管に入れた管から栄養を送る延命処置は行われなかった。そして今年1月、熊谷さんが見守られ、父親は穏やかな表情で亡くなった。

このように終末期の医療の希望について、判断能力があるうちに、自分の考えを記しておく文書は「リビングウィル」と呼ばれる。熊谷さんの父親は、自分自身の「死に方」について、日頃からよく話していた。そのため、熊谷さんがリビングウィルに記載された意思を知った時に、驚きはなかったという。そして本人の意思を尊重したことでも「よい死に方ができた」と納得しているという。

### 法的効力なし

ただ、リビングウィルの普及について、日本尊厳死協会北海道支部長でもある宮本医師は「患者側から提出されることはまだとても少ない」と話す。リビングウィルがないと、家族や医師は、延命を行うべきかどうかで迷う。そのため「少しでも長く生きてほしい」と、延命処置を望む家族が多くなる。数多くの患者の終末期に立ち会ってきた江別市らん病院の小野寺亮太・主任看護師は「まだ元気があったら、認知的機能に低下してしまえば、リビングウィルを残す機会を逃してしまふ人も多い」と指摘する。死期は突然ふりかかるとも、望む形で迎えたいなら「縁起で

## 話し合い、考え共有が大事

終末期の医療やリビングウィルについて、日本臨床内科医会の近藤彰副会長(写真)に聞いた。

地域の「かかりつけ医」として、人生の最期まで支え続ける医療活動を目指す日本臨床内科医会として、独自に「私のリビングウィル」という冊子を作成して啓発活動を行っています。リビングウィルを通じて患者の生きがいのある生、尊厳ある死についての考えを、共有していきたいと考えています。医療技術の発達により、人の死期は少しずつ先送りできるようになっています。しかし、判断力が衰えていく中で、回復の希望がない延命処置を避けたいという人が、多くを占めるようになってい

ます。  
そこで本人の意思決定能力があるうちに、家族と医療・介護従事者を交えて話し合い、考えを共有することが大事です。本人の価値観、死生観などを共有できれば、本人に意思疎通の能力がなくなっても、家族や医師が迷うことなく終末期の対応ができます。話し合いの中で意見が変わっても構いません。リビングウィルは何回でも書き直して大丈夫です。最大限の延命処置を望むという結論でも問題ありません。穏やかな表情で、望む形で臨終を迎えてもらうために、リビングウィルは大事な選択肢だと思えます。(談)



自分のため、家族のために  
希望を書き残しておく

判断力があるうちに死と向き合う

「まだ先のことと思わず、早めに取り組みたい。日話し、理解してもいつか大事だ。厚生労働省も終末期医療について、本人が家族や医療・ケアチームと話し合う「人生会議」の普及を促している。(栗原守)

妻とスーパ  
いつもの間合  
夕食の献立が  
妻とのコミュニ  
年を重ねるほど、  
互いに名前を呼ば  
パパ、ママとな  
今では、食べた  
目と息づかいで  
さみしい時、う  
言葉にしなくて  
息の合う関係。  
積み重ねた時間  
二人だけの宝物